

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史

## 生活文化史

<史料館だより・50号記念号>

- ◇近世絵図収集とデジタル化…………… 大国 正美 (2)
- ◇よみがえった「深江音頭」…………… 深江音頭復活プロジェクトチーム (7)
- ◇深江物語 (12)
  - 正寿寺と大日神社…………… 森口 健一 (13)
- ◇本庄の支配示す豊臣秀吉文書…………… 竹本 敬市 (18)
- ◇深江の心象風景 (2)
  - 深江の町並みと岡田家…………… 岡田 茂義 (23)
- ◇史料館この一年を振り返って…………… (31)
- ◇図書貸出サービスが最多更新…………… (32)
- ◇史料館日誌抄…………… 道谷 卓 (32)

2022.3.31  
NO.50

本年度収集した元禄16年(1703)の「山路庄七カ村山論裁許絵図」の住吉川上流部分である。西青木村など3カ村と魚崎村など4カ村が五介山付近の境界をめぐって争った。住吉川上流に西青木村が入会の山を持っていたことが分かる。(本文2頁)



神戸深江生活文化史料館

## 近世絵図収集とデジタル化

史料館長 大 国 正 美

史料館が神戸・深江会館生活文化史料室としてスタートしてから、満四〇年が過ぎた。今年度は計五点の絵図史料を収集し、神戸大学と連携文書を交わし史料のデジタル化をした。これま

でない大きな事業となった。史料館は平成二十九年(二〇一七)から神戸市立図書館の市民図書室の業務を行っており、わずかな収入だがそれを蓄えることで、こうした史料収集をすることができた。この新たに収集した史料の簡単な紹介と神戸大学で行ったデジタル化事業について報告したい。

### 元禄十六年の山路庄七カ村山論裁許絵図

入手したもので最も重要なのは、住吉山の境界を定めた山論



図1 元禄16年の山路庄七カ村山論裁許絵図(部分)  
(317.0×108.0)



図2 元禄16年裁許絵図の奉行花押と押印

の境界を定めた重要な判決である。『住吉村誌』に掲載しているのは住吉村側へ宛てたもので、絵図に言及がないうえ、奉行の花押や印の記載からみて判決文の写しではないかと思われる。

これに対し、今回の絵図は、西青木村などに宛てた原本である。『住吉村誌』の翻刻にも一部に誤りがあり、改めて内容の検討を行いたい。

享保十八年の魚崎村絵図

次の絵図は、住吉村の住吉神田と魚崎村の十六ヶ町との間で水利関係で紛争があり、西宮町六左衛門・横屋村宗右衛門・上嶋村平治左衛門・住吉村伊左衛門の大庄屋の面々が仲裁した絵

絵図である。『住吉村誌』に裁許文が紹介されている。しかし絵図の存在は知られていなかった。この争論は住吉・野寄・横屋・魚崎の四力村と、岡本・田中・西青木の三方村が争った争論である。住吉の五介山

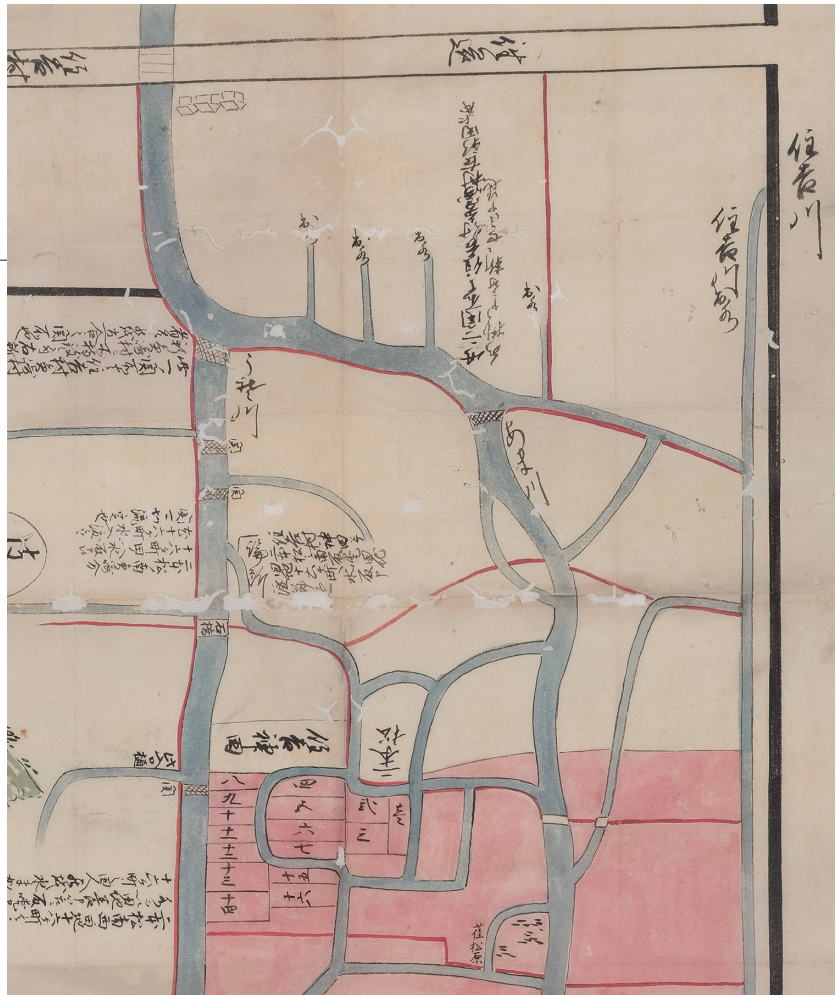


図3 享保18年の住吉村・魚崎村水論絵図(部分)  
南東の色違い部分が魚崎村で北西に十六ヶ町と住吉村の神田(84.0×41.0)

図である。用水堰は住吉村の往還をくぐって西から一ノ関がうそ川を通じ、二ノ関があま川を通じ住吉村・魚崎村の田畑を灌漑している。このうち、うそ川から二本松へ流れ、その西にある住吉神田、魚崎村の十六ヶ町へ流れている。この用水の取水場所が争論になった。絵図には住吉村の乙女塚(東求女塚)が

住吉川の西側の魚崎村の田地を描いた絵図である。集落は「居村」と書かれているだけである。「竹垣三右衛門代官所」とあり、寛政元年（一七八九）〜四年か、天保十一年（一八四〇）〜弘化四年（一八四七）ごろの絵図である。

**文政二年魚崎村絵図**

享保二十年（一七三五）に横屋村が魚崎村東浦手に新田を開発した際に、魚崎村が海岸一九町は魚崎村の支配と主張し認め

住吉神田の西に、魚崎村の雀松原が二本松の南東に描かれている。

**魚崎村絵図**



図4 享保絵図の乙女塚

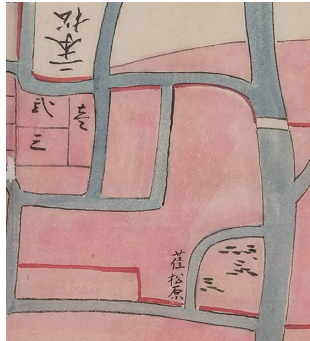


図5 享保絵図の雀松原

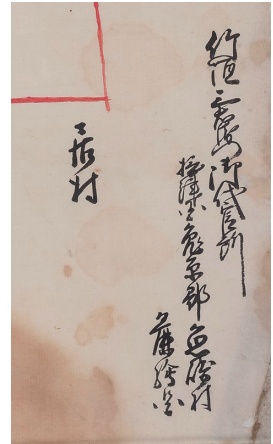


図6 魚崎村絵図の竹垣三右衛門代官所名

られた。その時の経緯を、魚崎村が文政二年（一八一九）に改めて奉行所に提出したものである。

東青木村から御影村までの浜辺は魚崎村の漁場で、他村の開発などは認められないというのが魚崎村の主張だった。

**寛延三年本庄・芦屋庄・西宮社家郷山論裁許絵図**

この絵図は、収集絵図ではなく、大仁四郎左衛門家文書とし



図7 魚崎村絵図（部分）(70.0×64.2)

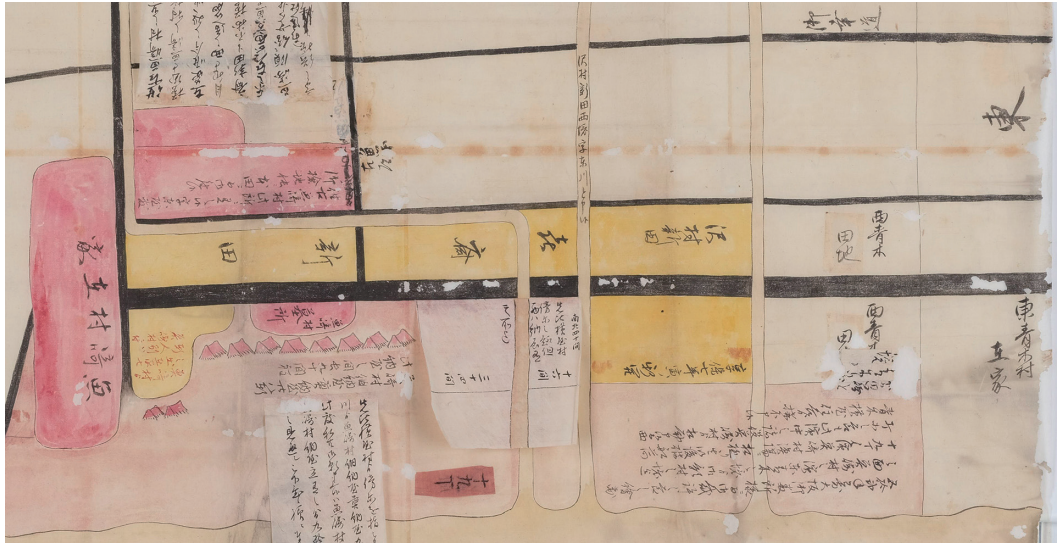


図8 文政2年魚崎村絵図(部分)(102.0×54.7)



図9 寛延3年本庄・芦屋庄・西宮社家郷山論裁許絵図  
大仁四郎左衛門家文書(250.2×237.3)

て森村の旧家に伝来している絵図である。寛延三年(一七五〇)に本庄・芦屋庄・西宮社家郷が山の境界を争い、裁許絵図として作成された。芦屋庄、西宮社家郷宛てにそれぞれ作成しており、西宮市、芦屋市ともに同じ絵図を所蔵している。この絵図

自体は原本ではなく精密に造られた写本で、押印の場所などで付箋で記している。原本を横に置いて複製を作ったことは明らかで、権利を守るために精密な絵図の複製を作るという習俗があったことが分かる。裏面には長文の判決文が記載されている。

山は測量に基づき正確に描かれ、はげ山の描写もある。このとき定められた境界が、現在の西宮市・芦屋市・神戸市の境界となった。

この絵図は阪神・淡路大震災の被災史料の救出活動で歴史資料ネットワークが発見し、地元で展示も行い『本庄村史』にも利用した。今回、神戸大学の科学研究費補助金を使ってデジタル化することになった。

明治十二年本庄三ヶ村・山路庄九ヶ村全村絵図

本庄と山路庄が山地の境界をめぐって争論になり、田中村と芦屋村の戸長の仲裁で和解した絵図である。絵図には赤い線で境界を引き押し、裏面には旧来の取り決めを廃棄しこの取り決めに従うことを明記している。当時地租改正が進んでおり、その過程で起きた紛争だと思われる。

田辺村が所有してきた同じ絵図を史料館が所有しているが、今回は岡本村が所持してきた絵図を購入した。いずれも押印のある現物で、各村が複製を作って所有し権利を守ろうとしたことが判明する。岡本村では、この絵図と元禄十六年の絵図を一体として保存し権利を維持することが軸に明記されており、権利の守り方の習俗を考える貴重な史料である。



図10 明治十二年本庄三ヶ村・山路庄九ヶ村全村絵図裏書  
(館蔵絵図214.0×101.0、新収集絵図211.0×101.0)



写真1 テレビ放映された「深江音頭」の復活  
(読売テレビ「読売テン」2021年11月7日放映より)

輪を作って踊った。観覧する保護者、招待を受けた地元深江の人々にとっても初めて目にする歌と踊りである。流れる音楽に乗せて「深江よいとここ」というはじめのフレーズが繰り返され、六番まで一気に女生徒達の踊りが披露された。世情をに

## よみがえった深江音頭

### 深江音頭復活プロジェクトチーム

#### 復活の日

令和三年十月六日、深江浜町にある兵庫県立東灘高等学校のグラウンドに軽快なリズムに乗せて、楽しい歌詞が流れた。歌とリズムに合わせて一〇〇名を超える女子高校生がいくつかの

ざわすいわゆるコロナ禍の中で、その暗雲を払うような気分を浮かれさせる歌と踊りだった。

この日、東灘高校で披露されたのは、令和三年から平成、昭和と三つの世を経て七二年ぶりによみがえった深江音頭だった。昭和二十一年に作詞作曲され、以後昭和二十四年まで毎年深江の大日神社境内で地元の人々が歌い踊った音頭である。

その深江音頭が消えて、七〇余年。歌った人も踊った人も遅からず消える時代になっていた。そのような時代にあって令和三年十月六日は、深江音頭がよみがえった「深江音頭復活の日」だった。

#### 深江音頭が出来た頃

昭和二十一年五月二十日は「深江の祭り」の日だった。本庄小学校の授業は十九日の宵宮は午前だけ、二十日本宮はお休みだった。当時深江は、神戸市と合併する前で本庄村深江と呼ばれ、村を挙げての行事だった。

村は、一年前の複数回にわたる空襲で多くの家が焼かれ、亡くなった人や傷ついた方も多くいた。人々はそのような中でも再び村を立て直すべく歩き始めていた。家族を失った方も少ない「喪中の村」というような複雑な感情の残る時代だった。

そのような中で「深江の村を生き返らせよう。お盆に慰霊と復活を込めて歌と踊りを作ろう」と、戦前から深江で地域の世話をされていて、後に本庄村議員になる黒田清一氏が作詞した。その詩に本庄村役場に勤務されていた関西学院大学グリーンクラブOBの細野寛一氏が曲をつけた。作詞作曲ができたときから、その両氏の夫人が三味線で伴奏し、振り付けを行い、地域の子

供を中心に踊りの稽古を行った。

深江音頭の歌詞には深江村の風情が込められている。作詞に当たっては、特に深江浜、漁業の様子について実際に漁業に携わっていた人々の話や言葉を聞き取ったといわれている。焼け野が原になった深江の村の風情を歌と踊りに託したのである。

ところが、深江音頭が大日神社の盆踊で歌い踊られて三年、昭和二十五年には消えてしまった。真偽のほどは不明だが、当時は神戸市や芦屋市との合併問題で村が分裂せんばかりの混乱で、「深江、深江ばかり言うのはいかがなものか」という風潮もあったとせいだとも言われている。

#### 地域が一体となって

敗戦の焼け野が原から七〇年が過ぎたころ、阪神深江駅が軌道の高架化にもなっており、新装された。駅全体の完成に合わせて構内で「深江独自の音楽を流すことが出来ないか」と、阪神電車の澤昌弘御影駅管区駅長から東灘高校（徳山学校長）に打診があった。高校は、深江塾の森口代表に相談を持ちかけた。深江塾からは「深江音頭という歌と踊りがあった。毎日、多くの高校生が利用する駅で深江独自の音楽を知ってもらおうのよいのではないか。地域の人にも知ってもらえる」と提案させていただいた。

新装の深江駅のデザインは深江の海、波をシンボル化したものである。駅が独自のものであるなら流れる音楽も独自のものがよいと、学校、地域、企業が一つとなって、消えた深江音頭の再現を目指して、深江南ふれあいのまちづくり協議会に「深江音頭復活プロジェクト」を立ち上げた。



写真2 写真のキャプションづくりに地域史を学ぶ

プロジェクトの合言葉は「復活と継承」。深江音頭の復活と継承を通じて「深江の町の活性化、町興し、知名度向上」を目指すことを目標とした。広報活動は最初に阪神電鉄深江駅で音頭の復活や由来の説明板掲示と、曲を構内で流すこと。次に「深江音頭の風景」と銘打って、神戸深江生活文化史料館の協力を得て六カ月間の企画展示を行うこととした。

展示は、史料館の大国館長の発案で地域の歴史を学び、作業もするという手法を取り入れた。史料館が歌詞に歌われた風景の古写真候補を提供し、東灘高校の写真部員らがその中から展示写真を選択した。森口らが当時の時代背景などを語り、高校生が深江の歴史を学び、歌詞に込められた風景を理解したうえで下書き原稿を作成した。これを大国館長が修正を加え、キャプションとしたうえで、八頁のパンフレットの版下を作成し印刷所に持ち込んだ。

マスコミに対しては高校がプレスリリースを行った。その結果、朝日新聞は九月九日朝刊、神戸新聞は十月九日朝刊に掲載





写真3 展示を取材する読売テレビのクルー

された。さらに十一月七日には読売テレビの人気番組「読売テレビ」の中で「よみがえる深江音頭」として約一分間の特集が放映された。

歌詞については、七五年前に大日神社でこの音頭で盆踊りを世話した方の手書きの歌詞が伝えられていた。活字になったのは昭和五十年代に発行された本庄小学校同窓会誌に、当時の同窓会会長であった志井保治氏が「歌は世につれ」と題して寄稿した文章が最初のもので、本誌三九号に「深江物語(1)―昭和二〇年代の駅前界隈を歩く」と題して筆者が歌詞と経緯を報告した。プロジェクトチームは、作詞、作曲者の特定、当時の曲踊りの制作背景や目的の調査を手始めに音頭復活の活動を開始した。歌える人の最年長者は一〇〇歳だった。しかし曲を復活

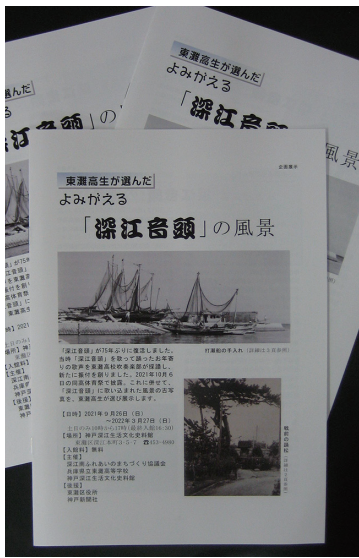


写真4 「深江音頭の風景」のパンフレット

の制作背景や目的の調査を手始めに音頭復活の活動を開始した。歌える人の最年長者は一〇〇歳だった。しかし曲を復活

させるためには録音し採譜する必要がある。昭和二十二年当時は小学生であっても実際に深江音頭を歌った方に協力をさせていただいた。

曲については東灘高等学校放送部が録音、吹奏楽部がその録音をもとに採譜した。踊りについては、映像記録がないため日本舞踊の師範の藤間祥寿師に歌詞と曲を伝えて令和版深江音頭の踊りとして創作していただくことになった。

プロジェクトは、六カ月の準備期間を経て令和三年四月からメンバーを決定の上、本格的に活動を開始した。四月に活動を開始したのは、東灘高校が兵庫県から「コミュニティスクール指定校」となったことを受け、その組織の主たる活動として実施することにしたためである。「復活の日」は東灘高等学校体育祭の日とすることを決定した。また展示は写真二〇点に加えて史料館が収集した史料を「東灘高生が選んだよみがえる「深江音頭」の風景」と題して開催。東灘区役所・神戸新聞社の後援を得て二〇二二年九月二十六日から翌年三月二十七日まで展示した。

若人の声・東灘高等学校生から  
深江音頭の譜面作成に携わり、校内で試験演奏したときに部員を取材した。その時の東灘高校吹奏楽部の話を紹介する。  
「和楽としての音頭と自分たちが練習している洋楽との差を感じたが、よい勉強になった」



写真5 展示の前で昔語りに興じる  
大西令子さん（右端）

てみれば気分よく演奏できた。これが音頭の良さかと思う」  
「この歌にある言葉（歌詞）やリズムが深江なのだと実感できた気がする」  
「メロディーが明るい感じで、町おこし復興のイメージとしてすばらしい」  
「自分たちも深江の歴史の一翼を担えることができたかな、という達成感に満たされた気分です」  
「こんなすばらしい歴史的活動に、東灘高等学校が関わられたことに感謝し喜びたい」  
さらに、新聞報道やテレビ放映の後、プロジェクトチームに

「歌の合いの手  
の言葉に、  
人が音頭の歌  
詞と歌を通じ  
てキャッチ  
ボールをして  
いるような一  
体感を感じ  
た」「録音さ  
れた歌を聴い  
たとき、洋楽  
器で演奏でき  
るか不安が  
あった。しか  
し、実際やっ

寄せられた声があります。

「深江にこんな素晴らしい音頭があったのか。誇りに思う」  
「深江の知名度が上がるし、街の印象もよくなるだろう」  
「もっとこんな埋もれた歴史的財産を掘り起こして知らせるよ  
うにしたい」

新聞とテレビ放映の報道結果からは、このプロジェクトが目  
指した「町の活性化や町興し、知名度向上」に寄与できたこと  
が読み取れる。  
(文責・森口健一)

#### 【参考資料】

##### 深江音頭

- 1 深江よいとこ 潮風受けて ヨイヨイ 今日も出船か勢ぞろ  
ひ 沖にや 網船 ポンポ船 大漁、大漁で 戻り船 ア  
リヤサット サット 戻り船
- 2 深江よいとこ そよ風受けて ヨイヨイ 六甲降れば復興町  
軒並みそろへて 大繁昌 栄え栄えて 明けて行く アリヤ  
サット サット 明けて行く
- 3 深江よいとこ 六甲のおろし ヨイヨイ 高い高橋 踊り松  
卯の花祭りの お神輿を 浜の戎さんが 手で招く アリヤ  
サット サット 手で招く
- 4 深江よいとこ ちぬの海 ヨイヨイ 恋の散歩も 白浜ふん  
で 沖のかもめや 浜千鳥 甘いささやき 波の上 アリヤ  
サット サット 波の上
- 5 深江よいとこ 朝日を受けて ヨイヨイ 今日も工場で 槌  
の音 稲も豊作 黄金波 皆笑顔で 暮れて行く アリヤ  
サット サット 暮れて行く

6 深江よいとこ 復興は進む ヨイヨイ 踊りおどれば 彼の娘は唄う 歌え踊れや 朗かに 手並みそろえて 深江音頭  
アリヤサット サット 深江音頭

【歌詞の補足説明】

2番の「大繁昌」「栄え栄えて」は、現在の深江北町の旧町名で「繁昌町」「繁昌通」、同じく「栄町」「栄通」を指す。

3番の「卯の花祭り」は、現在の大日神社発行の書面などでは「卯の葉祭り」となっているが、戦前から昭和三〇年代前半までは深江の祭りは「卯の花祭り」と称していた。

4番の「ちぬの海」は大阪湾の雅語で、本庄小学校の校歌にも使われている。

5番の「稲も豊作」は深江が半農半漁の村であったことを表わしている。大日神社の法被や浴衣の模様が「波」と「稲穂」も同じ意味。

深江小唄

- 1 深江名所は 踊り松 高い高橋 片葉葦 卯の花祭りの 伊達姿 末は鶴亀 五葉の松
  - 2 澄んだ青空 磯の松 波はさざ波 白帆が見ゆる 粋な姉さんの 艶すがた っこり笑へば 片えくぼ
  - 3 今日東風 出船の支度 向ふ鉢巻 玉の汗 エンサエ ンサの 勇み肌 続く大漁で 大磯
  - 4 白い砂浜 恋の夜 好いた同士 忍び逢い 彼の乙女の姿が 浜千鳥 何に啼くのか 帰り雁
- この歌詞は二枚の便箋に書かれており、末尾に制作発表の日や作者の氏名が下記のように記載されている。

昭和二十一年五月二十日

作 詞 黒田清一 作 曲 細野寛一

三味線 細野光子 踊・振付 黒田浜子

このたびの「深江音頭復活プロジェクト」では、「深江小唄」の曲は発表していないが、東灘高等学校吹奏楽部では譜面を作り演奏もした。小唄の踊りについては現在、藤間祥寿師によって創作を検討中である。

【深江音頭復活プロジェクト】

- 歌唱再現 藤本吉江・大西令子（両氏とも深江南町在住）  
採 譜 林 賢美・浜田梨花（東灘高等学校吹奏楽部）  
演 奏 県立東灘高等学校・吹奏楽部の皆さん  
舞踊指導 藤間祥寿（藤間流師範）  
舞踊助手 太田由美子・森口聡子（両氏とも深江南町在住）  
プロジェクトメンバー（順不同・敬称略）  
事務局長 大利清隆（深江南町三丁目自治会会長）  
撮影記録 納多章央（深江札幌地区自治会会長）  
メンバー 徳山 学（県立東灘高等学校 校長）  
浅田正樹（県立東灘高等学校 教頭）  
木村一成（県立東灘高等学校 教頭）  
西山重樹（県立東灘高等学校 写真連盟理事長）  
大国正美（神戸深江生活文化史料館 館長）  
植田延生（深江南ふれあいのまちづくり協議会委員長）  
谷屋正廣（深江南ふれあいのまちづくり協議会監査役）  
中井新三郎（深江南町四丁目自治会会長）  
森口健一（深江南町二丁目自治会会長・深江塾）

総指揮



深江物語 (12)

# 正寿寺と大日神社

深江塾 森 口 健 一

正寿寺に伝わる「御真筆」

前回「深江物語(11)」において、大正十年(一九二一)武庫

深徳院月准 代上 昭和四十七年 十二月七日	知足院惠力 代十 昭和九年 十月三日	壽重院因宋 代九 慶應四戊辰年 九月五日	解脱院理圓 代八 弘化三千年 八月二日	三味院惠音 代七 寛政九丁巳年 三月三日	明明院延壽 代六 安永八己亥年 二月五日	清浄院理傳 代五 宝曆六丙子年 九月十日	覺法院理山 代四 元文五庚申年 十一月三日	復正院龍音 代三 享保四己亥年 六月十一日	靈長院惠空 代二 元禄十己巳年 九月九日	法教院空昭 基 元禄十戊寅年 八月五日	正寿寺 曆代住職忌日 傳行化五十三 嗣法化益九年 法脉緒譜廿三年 傳法弘法廿三年 法脉行化十八年
--------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	------------------------------	--

写真1 正寿寺・歴代住職忌日



写真2 正寿寺の過去帳

郡教育会編纂発行の『武庫郡誌』の「永井山正壽寺(深江字垣添)」の記述をもとに正寿寺創建を中心に物語った。  
 今般、正寿寺・棘信勝住職より蓮如上人の直筆と伝わる「御真筆」の写真的提供とそれにまつわる話を聞くことができた。  
 前回と重複する部分もあるが、あらためて地域の信仰にまつわることを書く。

『武庫郡誌』には、「正寿寺開基其他」として「寛永十年(一六六三)に空照が開基(寺を新しく作ること)し、その敷地は三六〇坪、檀徒は五百戸余ある」という。空照が開基であり最初の住職であるというのは、現在、寺に伝わる「正壽寺・歴代住職忌日」(写真1)の最初に「法教院空昭 開基」、忌日を「元禄十一戊寅年(一六九八)八月廿一日」と記していることが一つの証しといえよう。  
 『武庫郡誌』では、空照、正寿寺記録では空昭としている。ただし、この正寿寺の記録書類がいつ書かれたのかは定かではない。

一方で寺には史料として原典ともいえる文書が二つある。その一つが前回紹介した天保十二年（一八四一）の「蓮華勝會録」との表紙がついた「過去帳」（写真2、右上）である。もう一つが今般正寿寺から写真ではあるが提供を受けた、蓮如上人直筆と伝わる「御真筆」である（写真3）。「御真筆」には「南無阿南陀仏」の六文字が書かれてある。この「御真筆」は、「幾多の厄災を越えて寺に保存されてきた正寿寺の宝物である」「正寿寺が浄土真宗の寺であることの証しである」と棘信勝現住職はいう。

『武庫郡誌』の正寿寺「沿革」の記述は「文明年間（室町時代）真言宗の薬王寺という寺が、蓮如上人に帰依して浄土真宗と改宗して寺を道場延寿寺と変えた」との主旨の記述がある。



写真3 「蓮如御真筆」と伝える六字名号

### 正寿寺と延寿寺

現在深江本町三丁目にある正寿寺は旧町名が大日町、旧小字が垣添に相当する場所にある。ここに正寿寺ができたのは、江戸時代の寛永十年（一六三三）で、浄土真宗に改宗し延寿寺としたのが室町時代の文明年間（一四六九〜八七）であるから、一七〇年間ほどが浄土真宗・延寿寺が所謂深江の寺ということになる。

「御真筆」が文明年間に蓮如上人から改宗の証として授けられたものであるとすれば、道場延寿寺という寺において保持保管されてきたのであろう。その「御真筆」が現在の正寿寺にあるという事は、正寿寺の元は延寿寺ということになる。

『武庫郡誌』は「（延寿寺は）寛永十年（紀元二一九三年＝一六三三）之を現

今の位置（現深江本町三丁目）に移転せり」と書いている。延寿寺の元は薬王寺で、かつて深江には小字として「薬王寺」という場所があった。現在の阪神深江駅すぐ北西に出会橋があり、その橋あたりから北に

向かって高橋川が三本に分かれていた(図1)。その中央が串田川で薬王寺の小字があった場所は、串田川西岸沿いである。

そうすれば、薬王寺は室町時代まであり、江戸時代初期まで、浄土真宗の道場延寿寺と宗派と名前を変えて、そこにあったとしてもおかしくはないだろう。

この仮説というか推理が当たっているならば、薬王寺に祀られていた「真言宗の本尊・大日如来」はどうなったのであろうか。巷間流布しているのは「真言宗に改宗して、寺を出された大日如来は村人が引き取って大日神社(正式名称・大日靈女神社)に祀った」という話である。正寿寺の棘住職は「仏様を寺から何も手を講じないで出す事は考えられない。宗派を変えたからといって本尊を追い出すような態度は、日本人の宗教感覚に合わないと思う」と話す。

#### 大日神社

仮に、深江の人々が罰当たりなことをしないとすれば、大日如来様の祭られるべき場所をどうしたのか？

『武庫郡誌』の大日神社の由緒には以下の通りある。

深江字垣ノ内に在り。大日靈女神を祀る。境内四一八坪あり。其創祀詳ならず。然れども元薬王寺と云へるあり、真言宗に属せしを以って、大日如来を本尊とせり。當時は本地垂跡(垂迹の誤記か)に據りて宮寺たりしものならん。

正寿寺の由緒とほぼ同様で、元薬王寺が大日神社の前身で、本地垂迹説によって、神社附属の寺院だった推測している。

続いての記述は正寿寺の沿革に似ている。

天明年間本願寺八世蓮如上人布教の際、時の住職観空之に帰依し、改宗して弟子となり、六字名号を授けられ、之を本尊として崇むるに至り、爾来大日如来を祭祀する者なきに至りたるを以て、村民之を神主に譲り大日靈女神社として祭祀を続けるにいたり、明治六年八月村社に加列せらる。

その主旨は、正寿寺の由緒によく似ているが蓮如上人に帰依した時の住職は観空となっている。蓮如上人から六字名号(御真筆)を授けられて、之を本尊として祀るようになった。大日如来は神主に譲り祭事儀式は大日神社として続けることとなった。明治六年八月には所謂神仏分離令によって深江村の村社と定められた。薬王寺は延寿寺、正寿寺と移ったが薬王寺があった場所の小字はしっかりと受け継がれたのであろう。

#### 小字から寺社の由来をみる

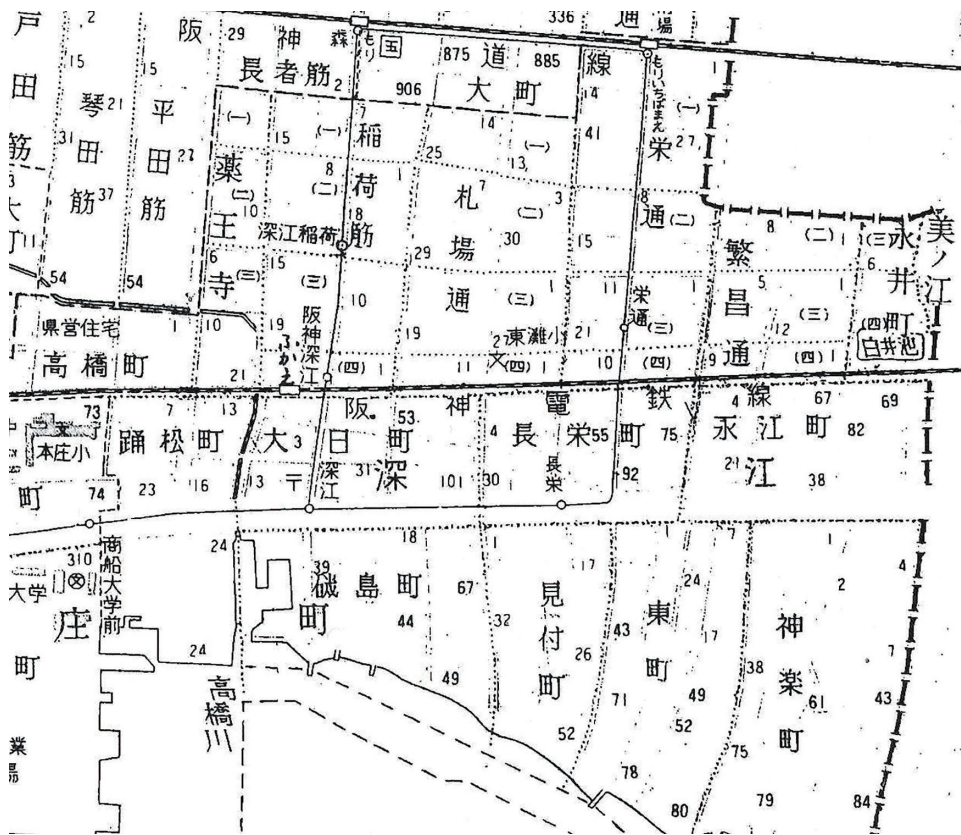
ここで、明治時代以後も残されていた深江村の小字から正寿寺、大日神社の由来を考えてみる(図1)。鍵になるのは『武庫郡誌』の大日神社の項に「薬王寺は宮寺であった」という記述である。

宮寺とは神社と寺、神と仏が神仏習合の思想の中で一体とみなすものである。深江で言えば、大日神社が鎮守の神としてあった。その神域を「垣ノ内」という小字で残した。「垣ノ内」というのは垣根に囲まれた場所や土地という意味と共に、神社の敷地を意味する。小字「垣ノ内」の現在地名は深江本町三丁目で、

図1 明治9年の小字と土地利用図



図2 昭和42年 神戸市東灘区深江地区





神社の所在地は三丁目五にあたる。その北に神社の後ろを意味する「宮の後」（堂の後とも）がある。阪神電車軌道に沿った場所、稲荷筋四丁目と札幌通四丁目付近を経て、現在地名は深江北町三丁目の南端である。

「垣ノ内」の南には「大日前」という小字があった。旧の西国浜街道を挟んで、昭和四十二年の地図（図2）によれば本庄町深江大日町を経て、現在町名は深江本町三丁目二にあたる。

正寿寺のある小字は「垣添」であった。「添」は本体・元があって「後」とか「付け足す」「加える」「付属する」意味がある。すると、これら小字は神社を中心に地名として付けられた。さらに時系列で言えば「垣ノ内」の大日神社を先とし、「垣添」の正寿寺を後と見ると筋が通るように思うのだが…。

更にその推理を補うとすれば、深江には、かつて現在の深江南町二丁目付近を「東浜」、踊松の南を「西浜」という小字で呼んでいた。基点を大日神社に置いて南を見れば、東浜・西浜（東、西の海岸・海）というのがうなずける。即ち、大日神社が古くから存在し、地域の方位や名前は神社から見付けられたと推測するのである。神社がなければ「西浜」や「東浜」「宮の後」や「大日前」「垣添」という地名はありえないはずである。

次に最近まで小字名が残っていた「薬王寺」である。出会橋北で高橋川が三支流に分かれ、東端が四つ松川である。その東側に「四ツ松」があった。稲荷筋三丁目から四丁目を経て、現在町名は深江北町三丁目。四ツ松川の西に流れる川が串田川。串田川に接してに西に「串田」と「薬王寺」がある。

ついでながら「薬王寺」の西南に接して「墓ノ後」という小

字があった。明治九年の深江の小字図では、深江地域では最も広い面積があるように見える。明治時代の地図（図1）を見れば、西国浜街道の北に墓地がある。

「昭和のはじめから戦後にかけても、四三号線から本庄小学校あたりを掘り返したときには瓶に入った骨壺がいくつも出てきたのを見たことがある」と深江に永く住んでいた深江塾・飯田一雄氏は語る。「薬王寺」に隣接して「墓ノ後」という小字もなにやら関係がありそうに思えてくる。

#### 本地垂迹説、宮寺、御真筆

現在の本庄墓地がいつごろ出来たのか知らない。しかし、この付近に墓地が点在していたらしいことは、古い地図からもうかがい知れる。今日の墓地は、付近に点在していた墓地をまとめたものであろう。まとめた結果、小字として「墓ノ後」としたのかもしれない。その地が「薬王寺」に隣接しているのにもなにより意味ありげである。

平安時代からの神仏習合思想によって大日神社と薬王寺は広義では一つの宗派に属するものといえる。祭祀としてみると、仏教儀式を執り行うのは室町以前は真言宗の薬王寺であり、室町時代から江戸時代初期までは浄土真宗の延寿寺、さらに江戸のはじめから今日までは浄土真宗の正寿寺が行ってきた。

延寿寺、正寿寺と名前は違っても、浄土真宗でありその証しとして「御真筆」は室町時代から深江の地に保持されて今日に至っている。

本文作成に際しては棘信勝正寿寺住職に多大な協力を得た。末尾ながら御礼申し上げます。

# 本庄の支配示す豊臣秀吉文書

## 新出の知行宛行状と朱印状

竹本敬市

はじめに

たつの市新宮町平野の村田家に龍野藩士であった垣屋家の史料が大量に残っていた。幕末の段階で村田家は垣屋家から養子を迎えて親戚関係にあり、明治に入って垣屋家文書が村田家に移管された。この「龍野藩士垣屋家文書」(たつの市立歴史文化資料館蔵)の中に、摂津国菟原郡本庄を垣屋孫一<sup>1)</sup>に宛行つた秀吉の知行宛行状も含まれていた。他にも浅野弾正長吉の書簡や伊達政宗の書簡もあった。その内容を紹介したい。

### 新発見の秀吉の本庄内の知行宛行状

新発見の秀吉の菟原郡の宛行状は次のようである。

【史料1】(龍野歴史文化資料館蔵、目録一五八九)

摂州菟原郡内森村式百石事、宛行訖、永代可全領知状如件

天正十一

八月朔日 秀吉(花押)

垣屋孫一殿

これは垣屋孫一が秀吉から摂州菟原郡の内の森村の二〇〇石を宛がわれたもので、天正十一年(一五八三)八月朔日の日付がある。秀吉の花押入りである。文書に出てくる「孫一」は系

図や後掲の史料に出てくる「孫市」「孫一郎」と同一人物と考えられる。

森村は「慶長摂津国絵図」に芦谷川の西の六甲山麓にある村で三・三石余とあり、村の大部分が宛がわれたことになる。垣屋氏が森村の支配をどのようにしていたかはこの史料だけではわからない。

中世に本庄とよばれた惣村は近世には深江・青木・森・中野・北畑・田辺・小路(以上神戸市)・三条・津知(芦屋市)の計九カ村に村切される。この史料には森村の名前が記さされていて、村切され近世村となる過程を示す重要な史料である。

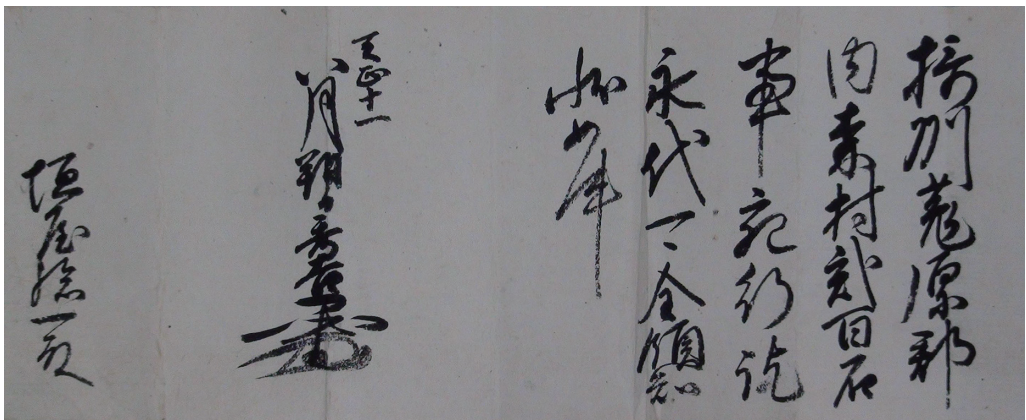


写真1 天正11年垣屋孫一宛豊臣秀吉知行宛行状

次は、文禄三年（一五九四）十月十七日の宛行状をみる。これも新たに発見された史料である。

【史料2】（同館蔵）

（目録一五九二）

摂州菟原郡本庄内式百石事、今度検地上を以、令扶助訖、全可領知候也

文禄三

十月十七日（朱印）  
（豊臣秀吉）

垣屋孫市とのへ

垣屋孫市が秀吉から摂州菟原郡本庄で二〇〇石を扶助されたものである。今回は森村とは明記していないが【史料1】を踏まえればやはり森村で与えられたのだろう。「検地上を以」とあるが、摂津国で太閤検地があったのは天正十一年と文禄三年といわれている。ここでいう検地は文禄三年の太閤検地を意味していると考えられる。

秀吉家臣・浅野氏からの知行目録と書簡

さらに文禄三年十月二十日付の浅野弾正から垣屋孫市宛の「御知行分目録」も発見された。

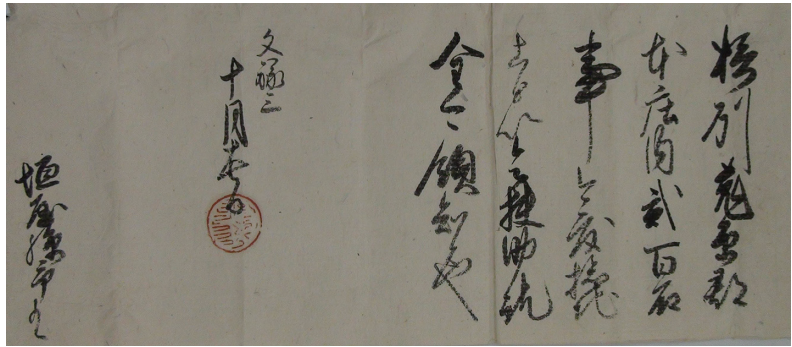


写真2 文禄3年垣屋孫市宛豊臣秀吉知行宛行状

【史料3】（同館蔵、目録一二三七）

御知行分目録

摂州菟原郡

本庄内

一 式百石  
以上

右、今度御検地切而 御朱印相改可被遣旨被 仰出候へ共、依御成相延候、然者時分柄之儀候而、早々得在所へ御越にて、可被御所務候、頓而 御朱印相調可參候、已上

文禄三年十月廿日

浅野弾正（花押）

垣屋孫市殿

この史料からすると、この度の検地をもって改めて朱印を遣わすというようにいつている。それが延びているが早々に在所に行つて所務をするようにいつている。さらに、やがて朱印を調べるともある。この朱印が前掲の朱印状をいつているのかどうか定かでないが、前掲の朱印状のことをいつているのであれば日付が前後する。このところをどう考えたらいいか疑問が残る。

この史料から、秀吉・浅野・垣屋の三者の関係が見えてくる。「御知行分目録」と「御」の字がついつている。秀吉が家臣に知行分を宛がう場合は「御」がつかない。「御」がついつているということは秀吉が垣屋に宛がうことを家臣の浅野がいつているから「御」の字がついつているということである。三者の主従関係・上下関係が表れている。浅野と垣屋の関係は主従関係というよりは上下関係といった間柄で、秀吉と垣屋の間に浅野が入つて仲

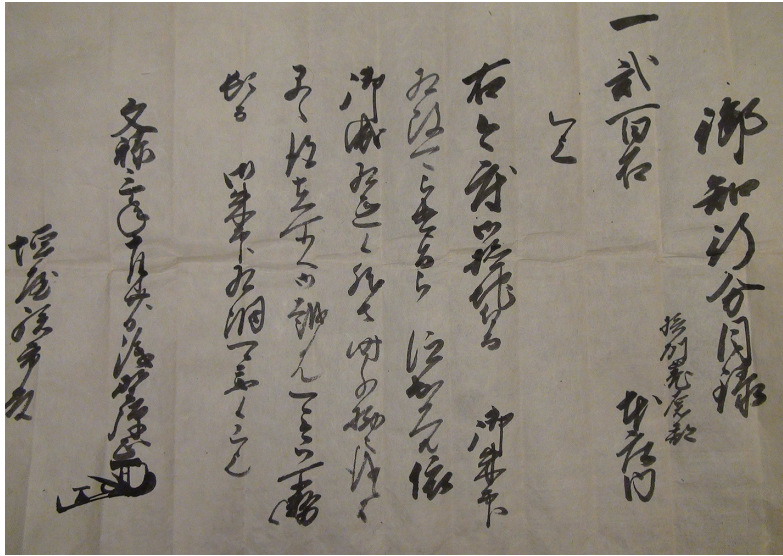


写真3 垣屋孫市宛て御知行目録

介している。検地奉行として地方支配のものへ伝達している内容である。

そのうえに注目される点がある。それは、文禄三年の史料には「摂州菟原郡本庄内式百石」「式百石 本庄内」とあるのに、天正十一年の史料には「摂州菟原郡内森村式百石」と、「森村」と村名が明記されている点である。しかも、文禄の浅野の「御

知行分目録」では早々に在所に行つて所務をするようにいつてゐる。文禄の検地をした後、地方知行支配が進められてゐることを示した史料として注目される。それにもう一つ、注目される浅野弾正の書

簡がある。

【史料4】(同館蔵、目録二六九〇)

今度御検地之儀堅被 仰出、其上各下々迄掟紙仕度候間、紛候事者有間敷と存候へ共、自然相紛たる者も有之、上を下、下を上ニ仕、又、竿違なども自然可有之候間、左様之所ハすくニ御引直て、田地不惑様ニ可被差置候、百姓何かと申候ハ、此方へ可被仰越候、次、舛納法之事者如御法度可被仰付候、恐々謹言

十月廿日

垣屋孫一殿

御宿所

浅野弾正

長吉(花押)

この史料は、年代は書かれていないが、日付や内容等から文禄三年の十月二十日のものと考えられる。摂津国辺の検地は文禄三年の九月から十月に実施されたことが残された検地帳からわかっている。ちょうど、摂津国菟原郡あたりの検地が実施された頃である。

この書簡は、検地に際しての請状の作成について述べ、田畑の等級の上下の違いや竿違いをなくすことを求めている。さらに、舛納をするのが記されるなど、秀吉が指示している検地条目の内容に当たるものである。

この書簡から垣屋孫一に知行された「摂州菟原郡本庄内」がいつ検地されたかは定かでないが微妙である。文面からすると、検地を実施することになったので請状の作成をすること、田畑

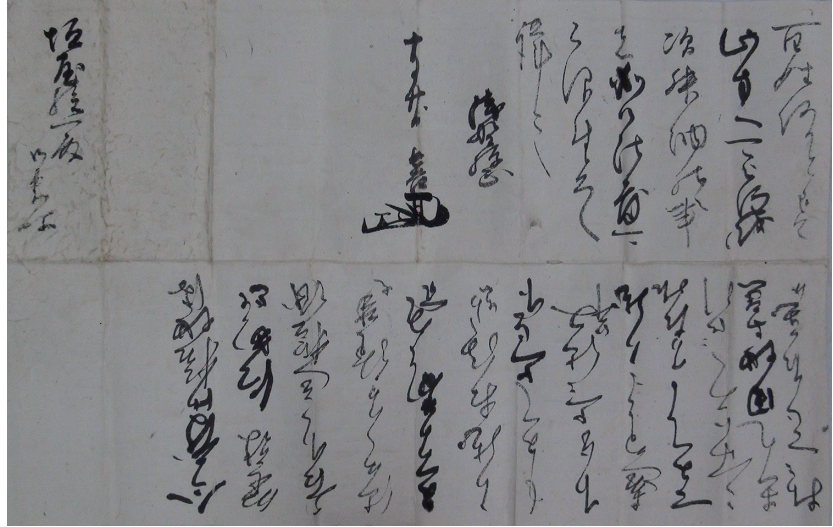


写真4 垣屋孫一宛て浅野長吉書状

である。史料の内容をさらに精査する必要がある。

まとめとその後の垣屋氏

垣屋孫市は秀吉から摂津国菟原郡森村に二〇〇石宛がわれた。天正十一年の段階で森村と村名が書かれている。摂津国は天正十一年に秀吉の検地があったと言われているが、その時の検地

の等級や竿違いをしないように、もし間違ったらやり直しをするように、百姓が何かと申してきたら浅野のもとに申し出るようにと指示している。検地の総責任者は浅野弾正で、その下で垣屋孫一が知行地の検地するようにも受け取れる。まさに検地の実態を示す内容

は村単位の指出であったと思われる。森村と村の表示があることから村切の成立に関する重要な史料である。江戸時代の本庄地域の村々は写真5の通りだが、豊臣政権下の天正（文禄年間）は本庄を基本的な地域名としつつも、すでに森村という行政単位が成立し、深江を含むほかの八カ村も同様だっただろう。

そして、検地の後で家臣に知行地が与えられたものと考えられる。森村は、慶長段階では村高が三三石余で、うち大部分の二〇〇石が垣屋孫市に知行地として与えられた。垣屋孫市には一村をすべて宛がわれたというのではないということである。村の中がどのように区分されていたのか、支配がどのようなになっていたのか詳細は分からない。当時の実際の地方地行の実態は分からない。

ところで、文禄三年では知行地支配のことが若干見えてくる。前掲の浅野弾正の「御知行分目録」には、今度の検地によって「早々得在所へ御越にて、可被御所務候」と、在所に行つて所務をとるようにと指示している。このときの文禄の検地は、浅野弾正の書簡に「上を下、下を上二仕、又、竿違なども自然可有之候間、左様之所ハすくニ御引直て、田地不惑様ニ可被差置候」とあるように実際に測つての検地であったことがわかる。この

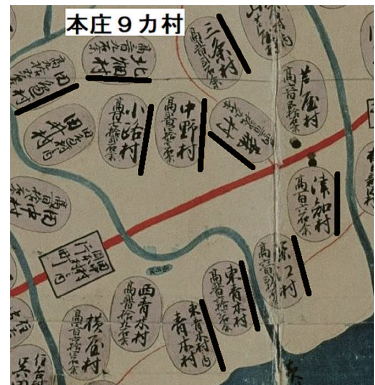


写真5 「天保国絵図」にみる本庄9カ村 (国立公文書館蔵)

検地によって村高などが確定するのでその上で、「菟原郡本庄」で二〇〇石の知行地支配をするようにということである。

垣屋孫一はその後どうなったのか。「龍野藩士垣屋家文書」にあるいくつかの系図には文禄三年に亡くなったとある。その時、豊政（幼名掃部）は二歳であったと系図にはある。脇坂安治が淡路にいたときである。系図には「豊政 母率来ル淡州二時二歳」とか「豊政時二二歳母子御家エ来ル」「豊政時二二歳御家エ来仕」さらには「母子共至脇坂館」「脇坂中務少輔聳也」とあり、文禄四年に母子ともに脇坂家へ至った。垣屋豊政以降は脇坂家に代々仕えている。龍野歴史文化資料館の「脇坂家分限帳」の垣屋系図によると、垣屋太郎左衛門豊政から始まり、正勝―久豊―豊矩―豊義―豊明―豊文―豊政―豊明―豊恭と続く。豊政は旗奉行で禄高は三〇〇石とある。正勝も旗奉行で禄高は三〇〇石。次の久豊は鉄砲頭で禄高は二七〇石、豊矩は初め御側用人で後に年寄、大年寄となり禄高は四五〇石。豊義は大年寄で禄高は四〇〇石と続く。垣屋氏は禄高が三〇〇石から四〇〇石の上級家臣である。

「脇坂藩士垣屋文書」には現在の辞令に相当する史料である「知行状」が残っていて「脇坂家分限帳」をより正確に補うことができる。元禄九年（一六九六）二月の史料によると、藩主安照が垣屋太郎左衛門殿へ二七〇石遣わすとあり、享保十二年（一七二七）二月の家督状では藩主安興が垣屋太郎左衛門へ二三〇石遣わすとある。

垣屋氏は、藩の軍事面を担当する役職、藩主の御側にいて日常の相手をしたり、藩主の家政向きを担当したりする役職等を

勤めていた。奥向きの担当でもあった。藩の政治経済面について藩主を補佐し運営する役職である。豊矩以降は年寄・大年寄に昇格するようになり、豊章は軍使取次役、物頭持筒頭、年寄、番頭、馳走役を歴任している。家督相続した段階からその人の業績によって加増されて四〇〇石位まで昇給している。いずれにしても、歴代の垣屋家の面々は上級家臣として藩の上層部に位置し、政務の大事なところを担っていた。

なお、今回発見された垣屋家文書は中世から近世への移行期の領主制を考えるうえで極めて重要な史料であり、垣屋氏の系譜と主従関係の移り変わり、検地条目と地方知行、村切に関して別稿を用意、『歴史と神戸』三五二号（二〇二二年六月号）に掲載予定である。併せてお読みいただければ幸いである。

#### 註

- (1) 史料には孫一、孫一郎と出てくるが史料に書かれている通りに孫一、孫市、孫一郎と記している。
- (2) 外納は従来の升を取り上げて京升に統一することを意味しているのではない。検地条目については中野等『太閤検地』（中央公論新社 二〇一九年）が詳しい。ただ、「外納」の意味が、従来の升を納めること、すなわち差し出すことを言っているのか、従来の升を指し出したうえで新たな京升で計量して納めることを言っているのか二通り解釈できる。
- (3) 脇坂安治が淡路に領地を得たのが天正十三年（一五八五）で、慶長十四年（一六〇九）に伊予の大洲に移る。文禄四年（一五九五）は丁度その間ということになる。



図1 深山医院のスケッチ

ここに記した上増呉服店は大きな店であった。深江第一の商店であり繁盛していた。通りに暖簾が下っており、これをくぐり、入る

五、旧道の商店街（深江の商店街）  
新道しんみちに対する旧道きゅうみちは深江の本通りであった。駅からこの本通りに入り東に向かって進むと、深山医院、阪口医院、豆腐屋があり、道の対面に八百屋の岡富さんがあった。更に進むと荒物屋があり、少し奥まった所に質屋があった。道の北側には大きな店舗、上増呉服店うえますがあり、更に東に油屋、散髪屋と続く。それ等の店舗と交り合まじって住居が並んでいた。岡田の家もこの道に沿ってあったが南北の通りの道角にあり、この通りにあった門から出入した。

## 深江の町並みと岡田家

深江の心象風景（2）

筆者 岡田茂義

と広い畳敷きの大広間が開ける。色々の呉服物が種類を分けて各所に積み重ねてある。思う品物の所に行って、丹物たんものを広げてもらってそれを見る。時々、この店から男女の東西屋（宣伝屋）が出て来る。男は皿鐘の付いた大きな太鼓を胸に当て、両手で撥ぼちを打ち、太鼓と鐘を鳴らしながら最初に「東西、東西」から始めて大きな声で上増屋の宣伝広告をしながら行進する。女は美濃笠をかぶり、手甲てこう、脚絆きゃはんの姿で三味線を太鼓に合わせながら後に従う。チン、ドン、シャンと鳴らすので、「ちんどん屋」とも云った。

前記の南北の通りを辿れば旧道より南へ進むと、先づ八百屋が出て来る。今では珍しい「棒だら」が藁縄で吊してある。鱈



写真1 上増呉服店の外観



写真2 上増呉服店の店内





# 岡田氏邸宅平面図

縮尺 百尺 分



図3 岡田茂左衛門の新宅平面図

岡田茂左衛門は、江戸時代以来の網屋茂左衛門邸宅を岡田善蔵に譲り、北側に新宅を建てたが、昭和20年の空襲で焼失した。岡田善蔵に譲られた網屋茂左衛門旧宅は、国道43号線の工事に伴いこの地に曳家工法で移転されたが、阪神・淡路大震災で全壊した

駄屋などがあった。その中心部に警官の駐在所があった。家族で定住していた。

註 ブリキは鍍力と書いた様に記憶する。今住んでいる東京には広しと雖もこのブリキ屋の表示を見ることはなかったが、最近漸く「ブリキ店」の看板を見付けたが、横にステンレス加工と添示して

あった。ステンレス加工の表示があつて初めてこの店舗の仕事が分る。場所は目黒区東山蛇崩の三方交差点の所にある。蛇崩とは、目黒川が氾濫して堤に敷設してある蛇腹が度々崩れることからの由來だろう。ブリキは今生産されてはいないだろう。薄いメッキが直ぐ剥げて下地の薄鉄板が赤く錆びる。昔はよくこの錆び付いた屋根を見かけたものだ。また、ブリキは厳格に云えば錫メッ

キの鉄板である。ブリキ屋は初めは、このブリキを使っていてブリキ屋と云ったが、次第に亜鉛メッキに変わって行った。その方が安くて永持ちするからである。この亜鉛メッキのものをトタンと云う。ブリキ屋がこのトタン鉄板を使ってトタン葺きの屋根を作った。然し、この作業の者をトタン屋と云わず、相変わらずブリキ屋と呼んだ。ブリキの語源はオランダ語の *Blik* によるものである。

## 六、深江の管領地

元来深江の土地は管領地であった。普通は城主があつて土地はそれに所属するものであるが、ここは徳川幕府直轄の地で所謂「天領」であり、幕府無き後、政府の管領地となつた。従つて、住居の集合地を境として、その東側より芦屋川までの広域地帯は個人所有が無く、地租（固定資産税）が全く上らず政府として已むを得ずこれを個人割当てにした。当時我が家は代々村長をしておつたので割当も厳しく、新規割当の土地からは収入皆無の事として、従来の所から上る収入では到底賄えず、遂に居を神戸の加納町に移した事がある。どの様な経過があつたか知らないが、また元の深江に戻り割当地に綿の木などを植えた。割当地は何れも水利もきかず荒涼たる荒地ばかりだつた。

時代が少し移り、正蔵の時にこの割当地の芦屋川寄りの砂地に黒松の苗木を植えた。この所は元々水田であつたのだが、年々の芦屋川の氾濫によって砂で埋められ、全く利用出来ない状態であつた。そこで黒松は早く成長するとしてこの苗木を植えたが全くその通り。戦争当時、神楽町と呼んだがここに住居を建てた時（昭和十四年）、既に太い幹になっていた黒松が敷地の中

に五十三本もあり毎年冬に藁で松の幹を巻いてその中に害虫が冬眠するため籠るのを春に焼き捨てる。そのため五十三枚の藁巻を作つた。住居の敷地の外に、その一区画三千坪の所にはこの黒松が生い茂り、戦時中、川西航空機の未完成戦闘機の隠し場所として利用された。穴を大きく掘り機体を埋めようとするが思うに任せず、一部、外部に現われていて機体のジュラルミンが月光を受けてキラキラと反射して、これでは敵機の目を逸らし得ないと思つた。

## 七、岡田家の家業

岡田家の家業は網屋茂左エ門と云う様に網引き（漁夫）の元締めであつたが、元来浄土真宗西本願寺の門徒であり、殺生禁断の法則に従い漁業を廃めて酒造りに移つた。祖母いくが三田、日西原の出であつたので、三田米を運んで醸造し「正蔵」の銘を付けたが、なかなか技術が必要で、殊に麴と精米を大桶に仕込んで寝かすことが、当時は非常に難しい作業だつた様に思う。今は簡単に桶の温度を調製出来るが、当時は暖冬ともなると、酒になるべき麴と米が一晩で酔になって終つたそつだ。高価な



写真3 岡田茂義氏邸の南側の庭

米を沢山使用しているので、一晩で身上しんしよ限り（破産）となったと聞かされた。

そこで、こんな危険な仕事より大桶があることなれば、醤油を作ろうと云うことになった。

蔵の内には大きな桶が並べられ、上の天井には長い梁はりが渡されている。その梁を伝わって鼠が走っている。時には下の大桶に落ち込むことがある。梯子を掛けて上り大桶の中を時々見ると、鼠が死んで浮かんでいることがある。驚いてこの事を伝えると、これで醤油に味が付くのだとの答えが返ってきた。この事を、随分後の事とはなるが既に亡くなられたキッコーマンの社長、茂木左平治さんに聞いたことがある。笑って答えず。銘醸造キッコーマンにもこの様な事が度々あるのだろう。

#### 八、深江駅前の思い出

阪神電鉄、大阪軌道鉄道（大軌、今の近鉄）、南海鉄道は早くから開通していた。何れも明治年間、或いは、大正初期の創業であろう。祖母に伴われて大阪に行くとき、淀川の長い鉄橋を渡る。祖母に抱き上げられて前方を見れば、鉄橋の梁の連続が恰もトンネルの形を見せ、長い長いトンネルを通っている様な感じを味わった。

早くより開通している阪神電車の深江駅の南側に、小さな百二十坪程の土地がある。先祖代々受け継いだ土地であり、売る訳にいかず、唯今、そこに駅前（平成十年編纂注）にふさわしい商店を容れる三階建の貸しビルを建設中であり、本年中に完成の予定。

この所を昔、貸家として利用しており岡本瀧三郎さんに貸していた。阪神電車に勤めていた。立派な風格の人で、その母も

亦、大柄な風貌豊かな土佐の人であった。それにふさわしい話も聞かされた。自分で子を放る。屁へを放ると云う様に産婆の手を借りずに自分一人で子を産む。この男勝りの豪放な性格は土佐人の気迫であろう。

瀧三郎さんは音声がかかった。而もよく響く声だった。当時流行した浪花節が得意でよく家に来て謳うたってくれた。浪花節だから語ると云うべきか。その大家の吉田奈良丸が住吉に住んでいた時代の事であり、その指導を受けていたのかもしれない。語り出すと浪花節だから一曲に長時間かかる。幼い私など直ぐ母の膝に眠ってしまった。

この瀧三郎さんの娘が昨年（平成九年）亡くなった葦原邦子であり、この貸家で生まれ、ここで育ち、宝塚歌劇へもここから通った。暫く経つと、この貸家も古くなったので新しく旧道に面した所に貸家を建てたのでこれに移り住んだが矢張りここから宝塚に通った。葦原邦子は尼崎女学校を卒業したが非常な優等生であった



写真4 昭和5年の深江駅

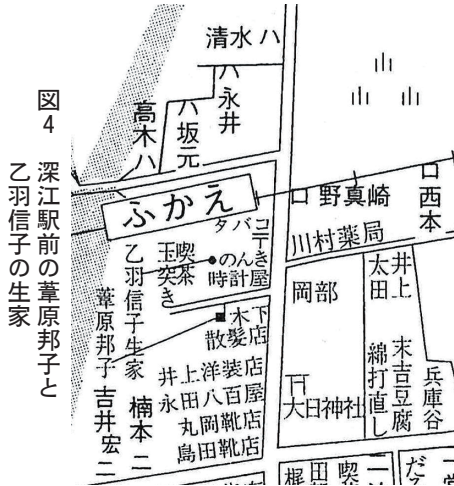


図4 深江駅前の葦原邦子と乙羽信子の生家

由。その後、宝塚へ通うのも尼崎からの福知山線を利用したのである。まだ阪急神戸線が通じてなかった時代である。深江駅前には、お餅屋さんの娘、音羽のふ子が育っている。平成九年八月十三日、テレビ放送、「徹子の部屋」で、淡島千景との対談、「葦原邦子さん追悼―平成九年三月十三日亡―」があり、我々が高商時代（昭和の初期）に憧れた葦原邦子の宝塚歌劇も初期の時代の写真が放映されたので懐かしく思った。葦原邦子と黒柳徹子の対談（昭和五十四年八月）も再放送された。さて、この貸家の裏に大きな池があり、蓮が植わっていた。毎年八月十五日、お盆の頃、大きな華やかな赤い花が咲く。父がこれを盥船に乗って切り集めて来る。父は豊中の近くの桑津村で育った。今でも箕面を経て京都への西国街道（国道一七一号線）沿いに、大きな姿を見ることが出来る「昆陽の池」の近くである。従って、幼児の頃より盥舟に乗って池底の蓮根を掘り採った。盥舟と云えば、洗濯用の普通のたらいより多少大きく深い。然し、これに乗り込んで浮かんで行くことは非常に難しい作業だ。しかも深江の池の場合には普通の盥を使ったので苦労した事と思う。

こうして切り集めた蓮の花を菰で包んで駅まで運び、電車で三宮、それより花の市場へと運び込む。池から上る時、瀧三郎さんが漸く起きて来て歯刷牙子で一生懸命歯を磨いている。見られると恥かしいのでその目を避けてこつそりと逃げて行く。

質素な生活をしてお小銭を儲けると云うのが岡田家の仕来り（家憲）だったのである。尚、父は正市と云い林家の四男として明治五年に生まれた。林家は当時広大な農地を所有していたが後年伊丹空港設置のため買収された。岡田家へ入婿となり、母ゑいと結婚した。昭和九年に正蔵より家督相続し、九代茂左エ門を襲名した。



写真5-2 乙羽信子



写真5-1 皇太子生誕を祝う深江の人々

## 九、高橋川の堤を歩いて野辺の送り

昔の葬式は、焼き場（火葬場）が今の墓地の一劃にあつたのでそこまで野辺の送りをするのである。お棺を納めた輿を担いで、淋しい高橋川の堤の道を静かに進むのである。灘の天井川と云って、川はすべて地面より高い所を流れている。六甲山は花崗岩で出来ているので、もろく壊れて砂となり、川はこの砂で埋まり、流れを防ぐ堤防は次第に高くなり、流域の田畑より一段高い所を水が流れるので灘の天井川と云う。

当時とすれば、極めて長寿であつた曾祖母（ひいばあさん）おたきさんが八十二才で亡くなり、小学校一年生の頃と思うが黒い詰め襟、半ズボンの洋服、黒い編み上げ靴を履いて、形見の品である、愛用していた杖を奉持して柩ひつぎに添って野辺の送りをした。このおたきさんは最後まで割合健康的で、家の中を歩くとき、「ホイ、ホイ、ホイ。」と云いながら座敷を横切って自分の



写真6 昔の高橋川河口

部屋に行つた。然し、時には漏らしながらそれと知らずに。

おたきさんは神戸生田の素封家増田甚五郎家の松造を養子として入れて、茂左エ門を襲名させることにした。この増田家は

これも資産家の北風家と親戚関係にあり、更に北風家は生島家の分家であり、本家の生島五郎左エ門と云えば当時神戸第一

位の素封家である。その子孫である生島五治君が三和銀行に勤め秘書役などをやった。ある機会に彼に、あなたのお名前五治の五の字の意味を知っている者は、三和では私一人だろうと云つた。彼も感激していた。尚、詳しい家系については過去帳参照のこと。

野辺の送りが済めばい

よいよ火葬である。火葬場には赤い煉瓦を積み上げた四角い煙突があつた。納棺したら、炉の扉口から藁束を指し込み燃やした。読経が終りこれで野辺の送りが済んだのである。遺骨拾いはその翌日。燃料は薪であり、現在の様に火力は無く、即刻収骨は出来ない。然し、骨は完全に収納することが出来た。喉仏を一番に捜した。最近二、三の火葬に参列したが、何れも肝心の喉仏を拾い出せなかった。

火力が強いので、骨が壊れてしまう。仏壇に持ち帰って供養



写真7 昭和5年の高橋川

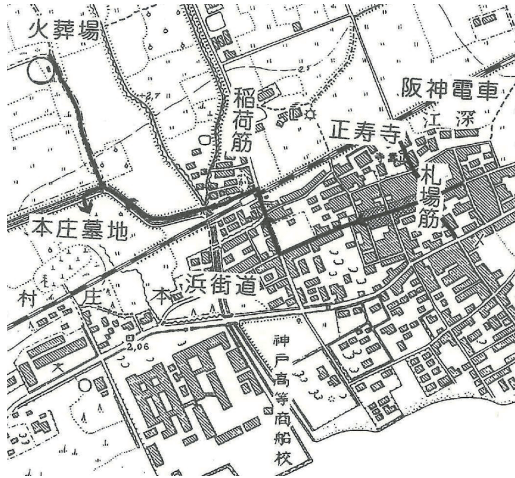


図5 本庄墓地と旧火葬場

すべきしるしが、無くなってしまふのである。

#### 十、当時の帰依の據点、正寿寺

平成九年三月二十二日、深江正寿寺に寄贈した親鸞聖人鑄造物の除幕式があった。午後一時、志井さんに講の首脳として指導していただいた。三十名集まる。家内と二人で白い幕を引き落とした。読経焼香の後、次の様に挨拶をした。この献像は震災供養と見るべきだが、更に意義深く、親鸞聖人に帰依して門徒として教えを受け、人生を導いてもらうためだと説いた。丁度今は彼岸（二十日が春分）の頃である。八十数年前の幼い頃、春秋の彼岸には必ず祖母に手を引かれてお寺詣りをした。大きな本堂に座って上を見ると、幅の広い欄間に大きな瓶が割られて噴き出る水の流れに乗って、子供が飛び出している。司馬温

公<sup>注</sup>の智仁勇の造形である。子供が瓶の中に落ちた、咄嗟に瓶を割る考えが頭に浮かぶ（智）。友達が瓶に落ちた。何としても助けたい（仁）。大きな石で、大きな瓶に挑み、これを破る（勇）。この智仁勇を見上げながらお説教を聞い

た。

この本堂は戦災で焼け落ちた。茂左エ門が妻ゑいの供養のため奉納したお堂のふすま絵も、戦災で焼けてしまった。

注 諸橋轍次篇『中国古典名言事典』。司馬温公、本名司馬光。北宋の名臣。王安石の新法に反対する。大師温公を贈られた。

幼い子供が院主さんのお説教を聞いても分かる筈がない。祖母の膝で眠ってしまう。大人の人達もこくりこくりと眠っている。そこで院主さんは説教を止めて落語に移る。万才かも知れない。

「お前どこから来たの？ 住所を云いなさい。」

「大阪ド、トンブリ川のコ、ニヤクヤのシャ、クヤ、」

「何、はっきりと言いなさい」

再び、

「大阪ド、トンブリ川のコ、ニヤクヤのシャ、クヤ、」

「分からない事を云うのやなあ。大阪道、道頓堀川の蒟蒻屋の借家か。やっと分かった。」

これで皆の衆、どっと笑って目が覚めた。

再び説教が始まる。説教が終って一人の老人が質問した。

「院主さん、ほんまに地獄極楽ありますのか？」

その答えは、

「ほんまにあるのかどうか儂も見たことがない。然し、若しほんまにあったらどうする。それだから今から説教を聞いて善行を積みねばならぬ。」

(続く)

**観光振興**

- 観光振興
- 観光振興
- 公共交通・バリアフリー
- 環境・物流対策
- 旅客給養業(船の給)
- マリンレジャー
- 船員の求人・求職
- 安全確保・事故防止

PDFファイルをご覧いただくにはAdobe Reader(無償)が必要です。ダウンロードした後インストールしてください。

Adobe Readerダウンロードページへのリンク

C8 印刷用ページ

## 神戸深江生活文化史料館



**新着トピック**

**施設概要**

館内では、飲食器、調理具、玩具、衣類、農具、漁具、年中行事関連用具、医療器具、戦争資料、文書、考古遺物などの貴重な遺産を数千点の資料を収蔵、展示している。これらの資料は、昔の生活を思い起こせるだけでなく、東神戸の地域社会の歴史や生活文化の歩みを今に伝えている。

・営業時間 10時00分～17時00分【入館は16時30分まで】  
 (月～金曜日休館、土・日曜日のみ開館)

・料金 無料

撮影を長く続けた井川宏之氏のネガが、保存条件のよくない倉庫に山積みされていることを知り、史料館で一時保管している。なんとか整理できないかと考えている。  
 (大国正美)

古絵図五点を購入、神戸大学と連携して、絵図のデジタル化にも取り組んだ。この内容も本誌で紹介している。

長らく研究員として活動してきた藤川祐作さんが病気となり、個人が収集した考古遺物や写真、拓本、図書などの貴重な資料の管理ができなくなった。このため主要なものを史料館、奈良文化財研究所、辰馬考古資料館で一時保管。考古遺物のうち採取地がはっきりしている遺物のうち西宮市ものは市教委に、また神戸市の遺物は市埋蔵文化財センターに寄贈した。

神戸市の写真広報誌『グラフこうべ』の写真

# 史料館この1年を振り返って

史料館のこの一年もいろいろなことがあった。新たな情報発信では、国土交通省の神戸運輸管理部が二〇二一年七月二十二日の海の日、兵庫海博倶楽部を発足させ、史料館も加盟館になった。兵庫県内の海に関する展示や資料を所蔵する資料館や博物館を集めて情報発信をしようというもので、二六

館が参加している。インターネットで「兵庫海博倶楽部」と検索すると、各加盟の最新情報やホームページにリンクする。

兵庫県立東灘高校や地元の深江南ふれあいのまちづくり協議会とタイアップした「東灘高生が選んだ よみがえる『深江音頭』の風景」展は本誌に紹介した通りで、好評で、令和四年八月二十七日まで延長した。この写真目当ての来館者も増え、図書サービス利用者も本の貸出、返却の前後に見入る姿も見られた。

## 図書貸出サービスが最多更新

神戸市立図書館の窓口やインターネットで予約した本を受け取ったり返却するサービスが令和三年度（二〇二二）は前年度比二八％増、前々年比九〇％増でほぼ倍増した。毎月の人数・冊数は表の通り。ほかの施設に比べ、一日当たりの利用者数・冊数とも抜きん出ている。利便性の高さが際立っている。

令和三年度の貸出実績は新型コロナウイルスの影響があったが休館はなかった。貸出人数平均四四七人、冊数は一三〇二冊でいずれも過去最高。一九年度は二四一人、六八九冊、二〇年度は三五〇人、一〇二二冊だったので、二年でほぼ倍増した。十月に初めて貸出人数五五〇人、貸出冊数一五一七冊で過去最高を記録した。また返却冊数は十月に一六三六冊となった。貸出冊数に応じて順調に伸びているが、貸出冊数をやや上回る月が多く、勤務先の近くの図書館などで借りたあと、自宅近くの史料館で返却するというニーズがあることがうかがえる。

（文責・大國正美）

2021年度図書貸出・返却実績

月	貸出人数	貸出冊数	返却冊数
4	388	1209	1216
5	462	1326	1410
6	397	1165	1157
7	490	1481	1458
8	481	1434	1598
9	422	1250	1301
10	550	1517	1636
11	426	1247	1204
12	422	1225	1227
1	443	1244	1331
2	458	1300	1374
3	430	1235	1247
合計	5369	15633	16159
平均	447.4	1302.8	1346.6

## 史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇二一年四月～二二年三月

＜二〇二一年＞

9月26日 企画展示 東灘高校生が選んだ よみがえる「深江

音頭」の風景（二〇二二年八月二七日まで）

11月20日 本荘児童館 （見学者 二五名）

＜二〇二二年＞

2月28日 本山南小学校三年生 （見学者 六七名）

## 資料寄贈者ご芳名

（敬称略）二〇二二年四月～二二年三月

井上 宏／佐原浩平 （道谷 卓記）

## 編集後記

小誌が五〇号を迎えたことを記念して増ページした。豊臣秀吉の朱印状の発見には驚いた。天正年間には本庄は村切が終わっており、深江村も誕生していたと思われる。また神戸市の図書貸出・返却サービスで貯めた資金を使い貴重な古絵図をまとめて五点収集した。本来は行政が収集するべきと思うが財政が厳しく、流出を防ぐために判断した。地域や東灘高校と連携して「深江音頭」の復活をPRする展示も行った。正寿寺の歴史、岡田茂義氏の回顧録の続編も未読いただきたい。（大國）

『生活文化史』 第50号 2022・3・31

編集／大國正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-453-4980 (FAX兼用)

http://fukae-museum.la.cocacn.jp/